

國學院大學學術情報リポジトリ

史料翻訳『THE NEW YORK HERALD』1860年版：
万延元年遣米使節団とミュージアムをめぐるテクス
トの諸相

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊東, 俊祐, 小池, 郁弥, 張, 蓉, 寺中, 憲史, 時吉, 咲子, 戸倉, 博之, 真島, 啓輔, 渡邊, 里美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000472

【報告】

史料翻訳『THE NEW YORK HERALD』1860年版

— 万延元年遣米使節団とミュージアムをめぐるテキストの諸相 —

Translation of Museological Source “THE NEW YORK HERALD, 1860s”: Aspects of texts regarding the First Japanese Mission to the United States and Museums

伊東 俊祐

ITOH Shunsuke

張 蓉

ZHANG Rong

時吉 咲子

TOKIYOSHI Sakiko

真島 啓輔

MAJIMA Keisuke

小池 郁弥

KOIKE Ikumi

寺中 憲史

TERANAKA Norifumi

戸倉 博之

TOKURA Hiroyuki

渡邊 里美

WATANABE Satomi

凡例

1. 本報告は、『THE NEW YORK HERALD』1860年版新聞記事にみられる万延元年遣米使節団（First Japanese Mission to the United States）の動静のうち、パテント・オフィス（United States Patent Office）とスミソニアン協会（Smithsonian Institution）に関係した新聞記事を抽出、精査し、日本語に翻訳したものである。なお、万延元年遣米使節団がワシントンD. C. を訪問し、フィラデルフィアへ移動するまでの1860年5月15日から6月10日の間に発行された新聞記事を対象とした。
1. 原史料は、國學院大學博物館企画展「古物を守り伝えた人々—好古家たち Antiquarians」（会期：2020年1月25日〔土〕～3月15日〔日〕）に展示された*THE NEW YORK HERALD; 1 January-30 June, 1860*の紙合冊本（図版1・2）を底本とした。
1. 新聞記事の精査、およびテキスト化に係る作業にあたっては、上記の底本に加え、アメリカ議会図書館（Library of Congress）が公開するデジタル・アーカイブ「Chronicling America: Historical American Newspaper」（ISSN 2475-2703）に所収の「Browse Issues: The New York herald」（<https://chroniclingamerica.loc.gov/lccn/sn83030313/issues/>）も適宜参照とした。
1. メタデータとして原記事（英語原文）の掲載箇所を示す新聞の発行日、発行番号、頁数、組段数、および執筆日を付した。

1. 原記事に大見出し・小見出し、又は日付のある場合は付し、それ以外は省略した。
1. 省略箇所は、「…」にて示している。
1. 原記事の掲載された新聞の発行日は、当該原記事の執筆日と必ずしも同日とは限らないため、執筆日は原記事に併記された日付を参照とした。
1. 改行は、原記事の体裁に拠らない。
1. 日本語訳は、可能な限り原記事のニュアンスに沿うよう翻訳することを原則とした。
1. 日本語訳は、本文のみとし、大見出し・小見出し、又は日付は省いた。
1. 日本語訳は、原記事の下に示している。
1. 脚注は、すべて訳注である。
1. 訳注において、比較検証の対象とした万延元年遣米使節団関係史料（以下、日記群）は、木村1974、佐野1946、日米修好通商百年記念行事運営会編1960（加藤・野々村・福嶋：以下、日記執筆者名を示す）・1961a（森田）・1961b（日高・名村・村山）、日本史籍協会編1971（柳川・佐藤）、沼田・松沢編1974（玉蟲）、吉田編1960（村垣）を底本とした。
1. 末文に付録として原史料、および関連する図版（1～12）、日記群に確認できるパテント・オフィスとスミソニアン協会の表現（表1）、見学日付の一覧（表2）を付した。
1. 図版3～12はいずれも1850年～70年代に撮影、ないしは作成されたものであり、アメリカ議会図書館、ならびにスミソニアン協会が公開するパブリックドメイン画像である。
1. 日記群の日付は和暦にて記されているため、アメリカ合衆国における西暦との対比については表2を参照されたい。
1. 本報告は、國學院大學大学院文学研究科「資料保存展示論研究・特殊研究AI・BI」（内川隆志教授）の一環として実施した近代博物館形成史に係る史料編纂、ならびに令和3年度国史学会10月例会（2021年10月30日開催）において報告した『『The New York Herald』新聞記事にみる万延元年遣米使節団の動向とミュージアム—パテント・オフィスとスミソニアンを中心に—』の成果に基づくものであり、伊東俊祐（大学院特別研究生）を中心に、戸倉博之（大学院博士課程後期）、小池郁弥、張蓉、寺中憲史、時吉咲子、真島啓輔、渡邊里美（以上、大学院博士課程前期）の8名の共同によるものである。
1. 史料編纂にあたっては原史料の所蔵者、ならびに國學院大學図書館には多大なご助力を得た。この場を借りて、感謝を申し上げます次第である。

5月20日（日）発行・No.8656／1頁6段・5月19日執筆

THE JAPANESE.

~~~~~  
Visit of the Orientals to the Patent Office, Mrs. Douglas' and the Concert at the  
Capitol Grounds – Their Views of the Manners and Customs of the Americans,  
&c., &c., &c.

OUR SPECIAL WASHINGTON DESPATCH.

WASHINGTON, May 19, 1860.

The Japanese contented themselves to-day with paying a visit to the Patent Office, and have postponed their visit to Congress until next week. They were delighted to find the presents received through Commodore Perry occupying position so commanding among the articles placed on exhibition.

(日)

日本人は今日<sup>1</sup>、パテント・オフィス<sup>2</sup>への訪問<sup>3</sup>に満足し、議会への訪問は来週に延期<sup>4</sup>した。彼らはペリー提督<sup>5</sup>が受け取った贈答品<sup>6</sup>が展示物の中で非常に重要な位置を占めているのを見て、とても喜んでいた。

1 西暦5月19日。

2 特許庁。1836年7月4日議会法（Act, July 4, 1836, Ch. 357, 5 Stat. 117）によってアメリカ合衆国国務省に設立された、知的財産行政を所管した連邦行政機関（図版3・4）。具体的な組織的性格については、今後の研究で明らかにしていく予定である。

3 使節団の日記群では、パテント・オフィスへの来訪日は2日後の西暦5月21日となっており、当該19日に見学した記録は確認できない。本記事も過去形で記されており、記事の誤りは考えづらいため、21日に同所へ来訪したグループとは別のグループが見学した可能性が想定される。なお、21日にもパテント・オフィスに来訪した旨の新聞記事は確認されない。

4 日記群によれば、合衆国議会議事堂（United States Capitol）には来週の西暦5月23日に訪問している。

5 マシュー・C・ペリー（Matthew C. Perry, 1794-1858）。海軍提督（Commodore, United States Navy）。1853年（嘉永6）に東インド艦隊を率いて浦賀、翌54年に横浜に入港したいわゆる「黒船来航」が知られる。

6 平成27年～30年度科学研究費補助金若手研究（B）「幕末維新时期日本をめぐる国際関係史構築再構築に向けて—東アジア比較・世界史の視点から」（課題番号：15K16816／研究代表者：福岡万里子 国立歴史民俗博物館准教授）、ならびに平成30年度大学共同利用機関法人人間文化研究機構若手研究者海外派遣プログラム「米国東海岸における19世紀日本関連在外資料調査—タウンゼント・ハリス及び日本開国への米国の関与に焦点を当てて」（研究代表者：福岡万里子 国立歴史民俗博物館准教授）において、スミソニアン協会・国立自然史博物館（National Museum of Natural History, Smithsonian Institution）に収蔵されるペリー提督やタウンゼント・ハリス（Townsend Harris, 1804-1878）に由来する日本関係のコレクション、万延元年遣米使節団の贈答品についての現地調査が実施されており、その成果については福岡ほか2021にて示されている。



5月23日（水）発行・No.8659／7頁2段・5月22日執筆

## Movements of the Japanese.

### RATIFICATION OF THE TREATY WITH JAPAN—HOW THE ILLUSTRIOUS STRANGERS ARE ENTERTAINED, ETC., ETC.

WASHINGTON, May 22, 1860.

.....

...Day after to-morrow, if the weather permit, the embassy will visit Washington monument, and the Smithsonian Institute.

(日)

…明後日<sup>9</sup>、天気良ければ、使節はワシントン記念塔<sup>10</sup>とスミソニアン・インスティテュート<sup>11</sup>を訪問する<sup>12</sup>。

9 西暦5月24日。

10 初代大統領であるジョージ・ワシントン (George Washington, 1732-1799) の功績を称えるために造営されたオベリスク。1848年着工、1884年竣工のため、1860年当時は未完成であった。

11 スミソニアン協会。イングランド貴族の出身で化学者、鉱物学者であるジェームズ・スミソン (James Smithson, 1765-1829) の遺言により彼のコレクションがアメリカ合衆国に遺贈されたことに伴い、1846年8月10日議会法 (Act, August 10, 1846, Ch. 178, 9 Stat. 102) によって設立された連邦独立信託機関 (図版5・6)。なお、協会本部 (Building of the Smithsonian Institution) は、1855年に竣工。2021年現在、21館のミュージアムと国立動物園を擁し、総数1億5,500万点に及ぶコレクションを有する、アメリカ合衆国を代表するナショナル・ミュージアムとしての地位を確立している。

12 日記群では、当日の天気は快晴であったことが確認されるが、2つの施設を訪問した旨の記述は確認できない。別のグループが訪問した可能性、若しくは予定が変更された可能性が想定される。

5月24日（木）発行・No.8660／10頁2段・5月21日執筆

## THE JAPANESE.

### COURTESIES TO THE ORIENTALS.

#### The President's Opinion of the Embassy,

#### VISIT OF THE JAPANESE TO THE CAPITOL, &c., &c., &c.

.....

.....

#### OUR WASHINGTON CORRESPONDENCE.

WASHINGTON, May 21, 1860.

*Japanese Peculiarities—Social Status of Japanese Ladies—Marital Customs—Account of the Pencil Sketches by the Japanese Artist—Rapid Diminution of the National Japanese Entertainment Fund—Courtesies to Prince De Joinville—Presidential Reception—Mr. Buchanan's Opinion of the Japanese—Movements of the Orientals—Receptions, Fetes and Parties in Prospective, &c.*

...

To-day many of the Japanese have been out—some driving, but most walking. Among other places they visited the Patent Office, and were highly gratified at seeing the Japanese collection brought to this country by Commodore Perry and others.

(目)

今日<sup>13</sup>、日本人の多く<sup>14</sup>は馬車で出かける者もいたが、ほとんどは徒歩で移動した<sup>15</sup>。とくに

13 西暦5月21日。

14 このうち、同行したことが分かっているのは、新見・村垣・小栗・玉蟲・柳川・野々村・福嶋・森田・名村・日高・村山の10名。

15 村垣の日記では「車に乗りて」、森田の日記では「三使其外御目見以下迄例ノ通馬車ニテ出」とあり、徒歩で移動したのは御目見以下の役人であったことが確認される。

パテント・オフィスを訪れ、ペリー提督らが日本から持ち帰ったコレクション<sup>16</sup>を見て、非常に感激していた。

- 16 ただし、この日にパテント・オフィスを訪問した使節団のうち、村垣の日記に「先年ミニストル＝ハリスに賜りし時服は其儘掛て有。」、玉蟲の日記に「蓋先年ベルリ持ち来リシナラン。御殿女中ノ衣服、又草鞋・烟管ノ類両三品ヲ見ル。」、野々村の日記に「日本ノ衣服ノ縫大模様、郡内縞等ノ小袖、都合十ヲ計有リ、是ハペロリ渡来ノセツ拝領ナリトイヘトモ、御時服ニハ無之、全買求メ持渡リシナランカ」、森田の日記に「日本ニテ兼テハリスエ被下時服等尽ク貯蔵有之」、日高の日記に「御国よりハリス江被下候衣類類」、名村の日記に「中ニ提督ベルリ日本ヨリ持帰リシ正服并衣類アリ」とある。いずれも衣類について言及されている点では共通するが、玉蟲・野々村・名村の日記ではペリーのコレクション、村垣・森田・日高の日記ではハリスのコレクションと記されており、齟齬が確認される。なお、福岡万里子らによる調査研究により1857年に將軍からハリスに贈られたと思われる時服9点がスミソニアン協会にTownsend Harris Japan Collectionとして収蔵されていることが確認されており(福岡ほか2021：pp.112-117)、同協会への収蔵の経緯については記録が存在しないため不詳とのことであるが(同：p.115)、パテント・オフィスとの関連性が想定される。この点については、今後の課題として改めてアメリカ側に遺存する史資料を精査していく予定である。



5月25日（金）発行・No.8661／4頁6段・5月24日執筆

## THE JAPANESE.

~~~~~  
Visit of the Ambassadors to the Washington Navy Yard—The Examination
of the Workshops—Their Future Movements,
&c., &c., &c.

OUR SPECIAL WASHINGTON DESPATCH.

WASHINGTON, May 24, 1860.

.....

This evening Senator Gwin and Professor Henry the rooms of the Ambassadors, to invite them to the Smithsonian Institute. They are going to-morrow.

(日)

今晚¹⁷、グウィン元老院議員¹⁸とヘンリー教授¹⁹が大使の部屋を訪問し、スミソニアン・インスティテュートに招待される。彼らは明日行く予定である。

17 西暦5月24日夜。

18 ウィリアム・M・グウィン(William M. Gwin, 1805-1885)。医師、政治家。ミシシッピ州選出合衆国下院議員(Member, United States House of Representative)、カリフォルニア州選出合衆国上院議員(United States Senator)等を歴任(図版7)。

19 ジョセフ・ヘンリー(Joseph Henry, 1797-1878)。物理学者。ニュージャージー大学(プリンストン大学)教授ののち、1846年にスミソニアン協会の初代事務局長(Secretary of the Smithsonian)に指名、逝去までその任にあたる(図版8)。

5月29日（火）発行・No.8665／10頁3段・5月25（26）日執筆

THE JAPANESE.

THEIR VISIT TO THE NAVY YARD.

Their Second Visit to the Secretary of State.

THE PRESIDENTIAL BANQUET,

&c.,

&c.,

&c.

————

.....

————

OUR WASHINGTON CORRESPONDENCE.

WASHINGTON, May 25, 1860.

The Chief Officers of the Embassy Again Visit the Office of the Secretary of State—Diplomatic Courtesies—Japanese Pocket Handkerchiefs—Their Visit to the Navy Yard—Their Arrival and Reception—Recognition of Captain Buchanan by the Japanese—Visit to the Machine Shop, &c.—The Curiosity of the Distinguished Guests Excited—Collation at the Residence of Commander Buchanan—A Japanese Reception Party—Account of the Ceremony—Epicurean Tastes of the Embassy—Japanese Reception to the United States Senators—The Ladies' Freaks with the Japanese Boy "Tommy" —Visit to the Smithsonian Museum—A Thunder Storm at the Capital—The Philadelphia Council Delegation, &c.

.....

To-day (Saturday) ...

The Ambassadors, it was expected, would have gone to the photographers to have their likenesses taken to-day; but a violent storm which broke with terrific force over the city at three o'clock prevented them. Previous to that time, however a batch of inferior officials visited the Smithsonian Museum, and were much interested with the articles from Japan there exhibited.

(日)

使節団は今日²⁰、写真家のところに行って肖像写真を撮ってもらはずだったが、3時になって猛烈な勢いで街を覆った激しい嵐のためにできなかった。しかし、それに先立ち、下級官僚

の一团²¹がスミソニアン・ミュージアムを訪れ、そこに展示されていた日本の品々に興味を示した²²。

- 20 原記事の執筆日付は西暦5月25日（金）となっているが、当該記事は途上にみえる「To-day (Saturday)」の記述から本記事は翌26日（土）のものと推定される。なお日記群では、西暦5月26日にスミソニアン協会を訪れ、同日の夕に雷雨があった旨が記録されている。
- 21 日記群によると、この日には正史・副使の従者である玉蟲・柳川・野々村・福嶋・木村、賄方の加藤・佐藤がスミソニアン協会に来訪しており、下級官僚の一团とは彼らを指すか。
- 22 この日にスミソニアン協会を訪問した使節団のうち、玉蟲の日記に「我国ノ什器ニテハ、太刀・長刀・槍・烟管・漆器・呉服等数十品アリ。パテントオフユシニ比スレバ、我国ノ什器多シ。」、柳川の日記に「日本の品ハ鑓長刀劔の類(註)を(註)はしめ御殿かた模様(註)の衣類より男女ともに ((爾)) 平人の服袴羽織其外呉服類より小道具類具類農業の道具(註)にいたるまであり」、野々村の日記に「先我朝ノ郡内縞二十反計、神棚二通、内ニ恵美須・大黒入レ有リ、其前ニ松崎満太郎使節(註)ト記手札有リ、鋤・鍬・鎌・釘・桶屋道具、焼物類ハ染付花瓶・植木鉢ノ類十計」、福嶋の日記に「日本ノ農具及ヒ鎗・長刀数アリ」、加藤の日記に「日本の綿布、或ハ錦画・田舎源氏の団扇に到る迄什物としてこゝに納む」、佐藤の日記に「我國産物類亦一局中に藏めり塗物陶器刀劔鎗長刀絹布の類及ヒ草履下駄草鞋足袋等也是ハコモトルベロリ始て我邦に來りし時持歸此所に納めしといへり」とある。

5月31日（木）発行・No.8667／3頁1段・5月28日執筆

THE JAPANESE.

Full Particulars of their Reception by President Buchanan.

CURIOUS CEREMONIES,

&c.,

&c.,

&c.

.....

OUR SPECIAL WASHINGTON DESPATCH.

WASHINGTON, May 28, 1860.

Namura Gohatsero on a Visit to his Friends—A Tete-a Tete with him on the Subject of the Presidential Banquet—The Japanese on a Shopping Tour—Gross Extortions of Washington Storekeepers—Description of the Presents from the Tycoon to the President, &c.

.....

At two o'clock I went up to the White House to have another look at the presents from the Tycoon to "his Majesty the President," and I unexpectedly saw his Majesty on the occasion. Respecting the gifts in question he said:—"It would be difficult to explain to them (the Japanese) why the President of the United States should not accept their presents, and so we keep them here. But I wish they shall go to the Patent Office."

There are locked up in the green room, and only partly unpacked.

As you enter the apartment you almost stumble over to sets of horse accoutrements of the most elaborate make, the ribs of the wearer are very large and beautifully diversified with raised figuring, richly colored. Birds, flowers, foliage and scenery are exquisitely depicted on them. The material is a cloth nearly as hard and solid as leather, of which latter the saddles are manufactured. The cane to be used by the rider is in laid with a species of glistening pearl, common in Japan. It is cut square off at the end and tipped with brass, and is of a length equal to that of an ordinary walking stick. At the butt is a tassel made of blue rope. These were brought over in shallow drawers like boxes, of a white wood resembling Quebec pine, and without ornament. Nearly one half of the packages are of this kind, the rest are covered with black lacquer externally, but white inside.

A four folding paper firescreen is the most conspicuous object in the room. It has a plain

black lacquered frame, and in the centre of each division is a square piece of what looks like yellow wirework, but which, on closer examination, is found to be of thin strips of straw. The paper portion of it is beautifully gilded and figured in colors. The lines are of the most delicate and varied description. A streak of sky is seen in the upper ground, and birds and scenery below. A tablecloth, or whatever else it may be called, composed of several large pieces of damask of different colors stitched together, is spread over entire sofa. It looks like a fancy quite or counterpane at first sight, and would answer the purpose very well, or it would make a showy pair or window curtains; but it will likely never be up into either.

Some specimens of wall paper that are spread over chairs close by are tasteful and unique, elaborate and ornamental. Yellow, green and red are the most prominent colors, and birds and flowers are thereon depicted with that exquisite warmth peculiar only to Japanese art.

Two white boxes are open containing rolls of silk. One of these discloses nothing but plain white crape silk, but the other displays twelve rolls of the best made in Japan—each roll presenting a different shade of coloring and a distinct pattern—and all good enough and pretty enough to be pronounced charming by any lady in America.

These is a water ladle, made of the same material as the equestrian's stick; and a lacquered wooden workbox figured in pink and gold on a copper tinted ground, with a loose top resembling that of a soup tureen. There are also twenty narrow white wooden boxes, containing one sword each, and a very neat little lacquered cedar wood bureau, such as I should not object to have presented to myself, with shallow drawers, and two folding doors like those of a cupboard.

These things are to be found more or less in duplicate in the packages which remain unopened. Those who expect to see wonders when they are thrown open for inspection at the Patent Office will be disappointed, and those who think the presents brought by this Embassy equal to the collection made by Commodore Perry, now in the Smithsonian Institute, had better undeceive themselves.

(日)

午後2時、私²³はホワイトハウスに行き、大君²⁴から「大統領陛下」²⁵への贈答品²⁶をもう一

23 『THE NEW YORK HERALD』記者。当該記事は一人称で執筆されており、記者自身の手記と思われる。

24 征夷大將軍の対外的な外交称号である「日本国大君」の意。当時の日本国大君は、江戸幕府第14代將軍徳川家茂(1846-1866)。

25 本来であれば、共和制国家の元首に対する敬称としては His Excellency (閣下) が一般的であるが、原文では君主制国家の元首に用いられる His Majesty (陛下) が用いられているため、原文に従った。なお、当該記事において His Majesty とした理由は不詳。

26 前掲訳注6を参照。

度見ようとしたところ、思いがけず陛下²⁷にお目にかかった。問題の贈答品について、陛下は次のようにおっしゃった。「なぜアメリカ合衆国大統領が贈物を受け取ってはいけないのか²⁸、彼ら（日本人）に説明するのは難しいでしょうから、ここに置いてあります²⁹。しかし、私はそれらがパテント・オフィスに行くことを望みます³⁰」。

グリーン・ルーム³¹に保管されており、まだ一部未開封である。

一室に入ると、最も精巧に作られた馬具類につまづきそうになる。乗用の肋骨状のもの³²はかなり大きく、色彩豊かな浮彫りの図柄で美しく施されている。鳥、花、葉、風景などが精巧に描かれている。後者の鞍は、皮革の硬さに近い頑丈な布地の素材で製作されている。乗馬者が用いる鞭³³は、日本でよく見られる艶々しい真珠の一種で埋め込まれている。普通の鞭と同じ長さで、先端は四角くに切り落とされ、真鍮が付けられている。端部には、青色の紐でできた房が付けられている。これらは、ケベック産の松に似た白木で、装飾のない箱のような浅めの引出しに入れられた状態で運ばれてきた。荷物の半数近くはこの類のもので、内部は白いが残りの外面は黒漆で塗られている。

この部屋で最も目立つのは、4枚の折紙でできた暖炉用衝立³⁴である。枠は黒無地の漆塗りで、各段の中心には黄色い針金細工のような四角いものが配置されているが、よく見ると藁の細長いものだと分かる。紙地の部分には、美しい金箔が貼られ、彩色が凝らされている。線はとても優雅で、多彩に表現されている。上部には一筋の空が見え、下部には鳥や風景が描かれている。テーブルクロスとでもいうのだろうか、色彩の異なる大きなダマスク織を何枚か縫い合わせたもの³⁵がソファ全体に広げられている。一見すれば、かなり派手なベッドカバーのようにも見えるがそのように用いることもできるし華美なカーテンにもなり得るが、どちらもそうした用途のために使用されるものではないだろう。

付近の椅子の上に広げられた壁紙は、味わいが深く、ユニークで、精巧で装飾性の高いものがある。黄色、緑、赤を基調とし、鳥や花が日本の美術ならではの絶妙な暖かさで描かれている。

27 当時のアメリカ合衆国大統領は、第15代ジェームズ・ブキャナン（James Buchanan Jr., 1791-1868）。

28 合衆国憲法第1条9節8項には、「合衆国から報酬、又は信託を受けた官職にある者は、議会の同意なしに王侯貴族、又は他国からいかなる種類の贈与、俸給、官職、あるいは称号を受けてはならない」（No Title of Nobility shall be granted by the United States: And no Person holding any Office of Profit or Trust under them, shall, without the Consent of the Congress, accept of any present, Emolument, Office, or Title, of any kind whatever, from any King, Prince or foreign State., *Clause 8, Section 9, Article One of the United States Constitution*）との規定があり、それを意識した発言と考えられる。

29 他方、加藤の日記では「大統領の所持ニハならず、宝蔵へ納て伝ふるなり」、佐藤の日記では「我國よりの御贈物亦プレシントの有と爲さずとして此寶蔵に納むと云」とあり、大統領への贈物は私有物とはならず、宝蔵（＝パテント・オフィスのことか？）に納められることを理解していたようである。

30 最終的にパテント・オフィスに収蔵されたかどうかは不明。

31 ホワイトハウス内の一室。

32 国立自然史博物館蔵の「鞍・鐙・轡・馬装束・鞭（馬具一式）」（Saddle/Bridle/Horse Trapping/Whip/Strirup, E14190-0）に含まれる鞍のことか（福岡ほか2021：p.126）。なお、万延元年遣米使節団の贈答品と伝えられる一式は福岡ほか2021に図版（pp.159-165）として掲載されているため、そちらを参照されたい。

33 前掲訳注32に含まれる木製黒漆塗螺鈿の鞭のことか（福岡ほか2021：pp.126-127）。

34 国立自然史博物館蔵の「翠簾屏風」（Screen, E14166-0）のことか（福岡ほか2021：pp.123-124）。

35 国立公文書館（National Archives）蔵の献呈目録に記述がみえる、大統領への公式贈答品として用意された「緞子幔幕〔二張〕」（現物は行方不明）のことか（福岡ほか2021：pp.118-119）。

2つの白い箱には絹生地36の巻布が入っている。そのうちの1箱には白地の縮緬布のみが入っているが、もう1箱には日本製の最高級が12巻、それぞれ異なった色合いと独特な模様の施された布が入っており、アメリカ人女性なら言葉には言い表すことができないほど、十分に質が良く美しいものばかりだ。

また、馬鞭と同じ素材で作られた柄杓37や、蓋付きスープ皿のような緩やかな上蓋の付いた、銅色の地にピンクと金色で描かれた漆塗りの木製道具箱38もある。加えて、白木材の長箱が20つあり、剣が1本ずつ入っている39。また、とてもきれいな杉材の漆塗筆筒40があり、浅めの引出しと戸棚のような2枚の折戸が付いていて、贈り物としても困らないものである。

これらのものは、未開封の荷物の中に多少なりとも含まれる。パテント・オフィスで検査のために開封されたとき、不思議なものを見ることを期待している人はがっかりするだろうし、この使節団からのプレゼントが、現在スミソニアン・インスティテュートにあるペリー提督のコレクション41に匹敵すると思わないほうがいいだろう42。

36 大統領への公式贈答品として「大和錦〔十巻〕」（現物は行方不明）、正使・副使らの私的な贈答品として「大和錦〔五巻〕」（同上）が用意されており、それらを指すか（福岡ほか2021：pp.118-119）。

37 国立自然史博物館蔵の「馬柄杓」（Dipper, E-14170-0）のことか（福岡ほか2021：pp.126-127）。

38 正使・副使らの私的な贈答品として用意された「蒔絵食籠〔壺対〕」（現物は行方不明）のことか（福岡ほか2021：pp.118-119）。

39 前掲訳注35の献呈目録では、大統領への贈答品として「太刀 二振」との記述がみえるが、その他については確認されていない。

40 国立自然史博物館蔵の「梅鶴蒔絵書棚」（Cabinet, E14188-0）のことか（福岡ほか2021：p.125）。

41 前掲訳注6を参照。

42 すでに知られた物を多く含むため、1860年以前の段階でスミソニアン協会に収蔵されたペリー提督のコレクションに匹敵するだけの価値ではないということの意味するか。あくまで記者の主観に拠った感想と見受けられるが、当時のアメリカ人の日本由来の文化的所産に対する意識が見て取れる点では示唆に富む。

5月31日（木）発行・No.8667／3頁1段・5月30日執筆

Movements of the Japanese.

OUR SPECIAL WASHINGTON DESPATCH.

WASHINGTON, May 30, 1860.

.....

They are getting anxious about going North, so much so that they don't care about visiting the Smithsonian Institute and other places. The time for going North is not definitely fixed, but probably next Thursday will be the day for leaving.

(日)

彼らは、スミソニアン・インスティテュートなどに行くことなど気にならないほど、北へ行くことに不安を感じている。北へ行く時期ははっきりとは決まっていないが、おそらく来週の木曜日⁴³が出発の日⁴⁴になるだろう。

43 西暦6月7日。

44 実際の出発日は、西暦6月8日（金）。使節団の日記群からは不安を吐露したような記録は見えず、記者側から客観的にみた使節団の様子と思われる。

6月1日（金）発行・No.8668／5頁3段・5月31日執筆

Movements of the Japanese.

PRESENTATION OF VIRGINIA TOBACCO TO THE AMBASSADORS—
MR. BOCOOK'S SPEECH ON THE OCCASION, ETC.

WASHINGTON, May 31, 1860.

.....

...To-day the Ambassadors visit the Smithsonian Institute and the Coast Survey. The under officials, in groups and unattended, visit the places of manufacture and art.

(日)

...今日⁴⁵、使節団はスミソニアン・インスティテュートと沿岸測量局⁴⁶を訪問する。下級官僚⁴⁷は、集団、あるいは単独で、製造や芸術の場を訪れる。

45 西暦5月31日。

46 1807年2月10日議会法（Act, February 10, 1807, Ch. 8, 2 Stat 413）によって、アメリカ合衆国財務省に設立された連邦行政機関。沿岸の地理的測量や地質等の調査を担った。

47 この日にスミソニアン協会を訪問した村山の日記によると、医師の村山・宮崎、勘定方の益頭、目付方の日高が同行しており、下級官僚は彼らを指すか。なお、村山の日記では同日に沿岸測量局を訪問した旨の記述は確認されない。

6月2日（土）発行・No.8669／10頁2段・5月30日執筆

~~~~~  
WASHINGTON, May 30, 1860.

*A Day of Repose to the Embassy—They Decline to Visit Annapolis—The Importunities of Yankee Inventors—Sale of Japanese Wares—The Would-be Instruments for the Conversion of the Orientals to Christianity—Bold Attempt to Force a Copy of the Bible Into the Pocket of a Japanese Prince—The Anxiety of the Embassy to Return Home—Donation of Seeds to the Japanese by the United States Agricultural Society, &c., &c.*

.....

...They (the Ambassadors) have also promised to visit the Smithsonian Museum to-morrow, and to be in readiness to leave Washington for Baltimore on Tuesday next.

(日)

…また、明日<sup>48</sup>はスミソニアン・ミュージアムを訪問し、来週の火曜日<sup>49</sup>にはワシントンからボルティモアに向けて出発する準備をすることを約束<sup>50</sup>した。

48 西暦5月31日。

49 西暦6月5日。

50 アメリカ合衆国連邦政府に向けて交わされたものか。実際の出発日については、前掲訳注44を参照。

6月2日(土)発行・No.8669/10頁1段・6月1日執筆

## THE JAPANESE.

### OUR SPECIAL WASHINGTON DESPATCH.

WASHINGTON, June 1, 1860.

.....

To-morrow the Princes, the Naval Committee, Captains Dupont, Lee and Porter, and two interpreters, Namura and Portman, will sit and be photographed by Brady.....They will visit the Smithsonian Institution after sitting for their likenesses.

(日)

明日<sup>51</sup>、公爵たち、海軍委員会<sup>52</sup>、デュポン<sup>53</sup>、リー<sup>54</sup>、ポーター<sup>55</sup>の各士官、そして名村とポートマン<sup>56</sup>の二人の通訳官が座って、ブレイディ<sup>57</sup>による写真撮影を受けることになっている<sup>58</sup>。……彼らは肖像写真を撮った後、スミソニアン・インスティテューションを訪問する。

51 西暦6月2日。

52 1860年に組織された遣米使節団担当委員会 (Commission, in charge of the Japanese Embassy to the United States) の別称か。デュポン海軍大佐 (Captain, United States Navy) を委員長に、リー海軍中佐 (Commander, United States Navy)、ポーター海軍大尉 (Lieutenant, United States Navy) を委員に、アメリカ海軍の上層部によって占められたことからそのように呼ばれたか。なお、3名はペリー提督の来航にも同行していたようで、遣米使節団の接遇に関与した (財部1999: p.64)。

53 サミュエル・F・デュポン (Samuel F. Du Pont, 1803-1865)。なお、翌年には北軍側として南北戦争に従軍する。後に海軍少将 (Rear Admiral, United States Navy)。

54 シドニー・S・リー (Sidney S. Lee, 1802-1869)。なお、翌年には南軍側として南北戦争に従軍する。

55 デヴィッド・D・ポーター (David D. Porter, 1813-1891)。なお、翌年には北軍海軍を率いて南北戦争を戦ったことで知られ、後年にアメリカ海軍史上2人目の海軍大将 (Admiral, United States Navy) となった (図版9)。

56 アントン・L・C・ポートマン (Anton L. C. Portman, 生没年不詳)。

57 マシュー・ブレイディ (Matthew B. Brady, 1823?-1896)。1844年にニューヨークに、1849年にワシントン D. C. に写真スタジオを設立。1861年に勃発した南北戦争において、数多くの記録写真を残したことで知られる。なお、彼とその甥による写真コレクション「Brady-Handy Collection」がアメリカ議会図書館によるデジタルアーカイヴ上で公開されている (<https://www.loc.gov/collections/brady-handy/>)。

58 日記群からは、同日中の写真撮影の記述は確認されない。

6月4日（月）発行・No.8671／4頁5段・6月3日執筆

## MOVEMENTS OF THE JAPANESE.

Presents for the Embassy—Visit of Senator Seward to the Ambassadors—  
Visit to the Smithsonian Institution—“Tommy” and the Ladies—Japanese  
Trinkets, &c., &c.

OUR SPECIAL WASHINGTON DESPATCH.

WASHINGTON, June 3, 1860.

.....

Yesterday afternoon the Princes and some half dozen others visited the Smithsonian Institution. Professor Henry gave an interesting experiment on atmospheric air pressure and the galvanic battery, electric light, &c., the different experiments lasting over two hours, after which the Ambassadors and suite were entertained by Madame Henry and her accomplished daughters at a magnificent collation. After a social chat and smoke all round they were shewn the collection of animals, birds, fishes, reptiles and other curiosities of the establishment. After expressing themselves much pleased for what they had seen, and the friendly manner in which they had been treated they took leave of Madame and Professor Henry and daughters and returned to their rooms.

(日)

昨日の午後<sup>59</sup>、公爵ご一行<sup>60</sup>はスミソニアン・ミュージアムを訪問した<sup>61</sup>。ヘンリー教授<sup>62</sup>が  
大気圧やガルバニ電池、電灯などについて興味深い実験を行い<sup>63</sup>、2時間以上に及んだ。その  
後、大使一行はヘンリー夫人とその優秀な娘たち<sup>64</sup>から豪華な晩餐会でもてなされた<sup>65</sup>。歓談

59 西暦6月2日午後。

60 このうち、同行したことが分かっているのは、新見・村垣・名村の3名。

61 名村の日記に「八時使節并役々電気機具等ヲ備置アル役所ニ到リ」、村垣の日記に「午後二時よりポルトル案内にて、スミスヲニヲといへる奇品はた究理の館成よし」とある。なお、スミソニアン協会の見学や科学実験のアメリカ側における経緯については、財部1999に詳しい。

62 前掲訳注19を参照。なお、村垣の日記には「局の長官」とみえる。

63 名村の日記に「右仕掛一見、此内ニハ電気機械、格物家・分析家ニ用ユル諸器械雛形等アリ」、村垣の日記に「エレキテルの器械種々有。窓をとじてくらくし、稻妻を席上に發し、さまざまの奇術を成して見せけり」とある。

64 ヘンリー教授にはハリエット夫人 (Harriet Alexander, 1808-1882) との間にウィリアム (William A. Henry, 1832-1862)、メアリー (Mary Henry, 1834-1903)、ヘレン (Helen Henry, 1836-1912)、キャロライン (Caroline Henry, 1839-1920) の1男3女がおり、一家はスミソニアン協会の2階東翼を居住地 (財部1998: p.176) としていた。

と一服の後、この施設の動物、鳥、魚、爬虫類などのコレクション<sup>66</sup>を見せてもらった。彼らは、自分たちが見たものや親切な対応に満足した後、ヘンリー夫人と教授、娘たちに別れを告げ、自分たちの部屋に戻った。

65 村垣の日記に「此局のかたはらに長官の住宅有。爰にて酒など出して妻子も挨拶し…」とある。なお、一家の居住地（Henry Apartments, East Wing）を捉えた1862年の撮影とされる当時の写真がスミソニアン協会のアーカイヴス（Smithsonian Institution Archives）に登録されており、新見らがもてなされたとおぼしき部屋（例えば「Dining Room」「Parlor」「Music Room」など）の写真も複数残っている。

66 村垣の日記に「萬国の物品、鳥獸蟲魚數萬種有。」とある。

---

6月10日（日）発行・No.8677／1頁1段・5月31日執筆

## MOVEMENTS OF THE JAPANESE.

~~~~~  
CLOSING SCENES IN THE CAPITAL.

~~~~~  
THEIR VISITS DURING THE LAST WEEK.

~~~~~  
The Embassy En Route for New York via Baltimore and Philadelphia,

~~~~~  
Grand Reception of the Japanese at Philadelphia.

&c.,

&c.,

&c.,

—————  
OUR WASHINGTON CORRESPONDENCE.

WASHINGTON, May 31, 1860.

*Slight Illness of the First Ambassador—Visit of the Members of the Embassy to the Patent and Coast Survey Offices—An Account of the Affair—Experiments in Electroplating In Presence of the Orientals, &c.*

His Highness the Ambassador-in-Chief had a headache on the day appointed to visit the Patent and Coast Survey Offices. The other members of the Embassy were accommodated in a single carriage, and on alighting in front of the building, which vies with that of its opposite neighbor, the Post Office, in the massive beauty of its stone work, they had a constitutional walk before them, in climbing the steep flight of granite steps which leads up to hall of entrance. They were struck with the imposing grandeur of this same edifice, but after crossing the threshold their admiration evidently lessened. They saw a few dirty cups and saucers, a cracked basin, containing some stained lumps of sugar, a discolored tin coffee pot and some stale cakes of gingerbread, distribute over a counter standing on their left; and behind this counter a dirty looking, ill clad little girl, who appeared to be in waiting to dispense cups of the refreshing mocha to all who asked; while to their right their eyes met, on a similar counter, a collection of semi-transparent tumblers and tarnished machine for manufacturing effervescing draughts.

The hall wore a slovenly, unclean appearance, so that it was pleasant to pats into the pure regions of the second floor, where the three Japanese no sooner caught sight of the sixteen before mentioned silk gowns, than they flattened their respective noses against the glass case in which they were hung, and laughed and chattered as if they had just made some

amusing discovery, and were led to investigate it further.

On turning from the contemplation of the state robes in question, their attention was attracted by the sight of a small collection of swords, which had been presented by various monarchs to various men on various occasions, which, as I am not writing a catalogue, it becomes me not here to describe; one from the Pascha of Egypt was admired most in particular. They were shown the autograph of Louis Philippe, and one of them associated him as the father of Prince de Joinville, whom he had met on an occasion to which I alluded in a former letter.

They remained here about an hour, namely, from twelve to one. No crowd accompanied them, for they have become so familiar to the public eye that few would go a yard out of their way to see them. Moreover, their visits to this museum have become of almost daily occurrence.

#### (日)

首席大使殿下<sup>67</sup>は、パテント・オフィスと沿岸測量局を訪問する予定の日に、頭痛に襲われた。他の随行員は一台の馬車に乗車し、向かいの郵便局と並ぶ石造の重厚な美しさを誇る建物の前に降り立つと、エントランスホールに続く花崗岩の急な階段を上るという体力のいる歩行が待っていた。彼らはこの殿堂の堂々とした雄大さに衝撃を受けたが、敷居を跨ぐにつれその感嘆はどうやら薄らいだようだった。左側のカウンターには、汚れたカップとソーサー、汚れた砂糖の塊が幾つか入ったひび割れたボウル、変色したブリキ製のコーヒーポットと腐りかけたジンジャーブレッドのケーキが配置されており、カウンターの後ろには、見た目が汚らしく身なりの悪い小さな女の子が、希望者にさわやかなモカを一杯出すのを待機しているようだった。右側の同様のカウンターには、半透明のタンブラーや変色した発泡性飲料製造機が並んでいるのが目についた。

ホールは使い古されていてだらしない外観だったため、2階の清らかな空間に足を踏み入れるのは心地が良い。そこで3人の日本人は、先に取り上げた16着の絹のガウンを目にするやそれらが吊り下げられたガラスケースに各自鼻を近づけ、何か面白い発見をしたかのように笑ったり、おしゃべりしたり、もっと詮索しようとしたりした。

話題になった儀礼服を凝視した後に、彼らの関心を集めたのは多くの王侯が何らかの折に人々に下賜した剣類の小さなコレクションだった。ここではカタログを書くわけではないので、説明はしない。エジプトのパシャ<sup>68</sup>からの剣は、大いに賞賛された。彼らはルイ・フィリップ<sup>69</sup>の直筆手稿を見ると、そのうちの1人が、公式書簡で言及した折に会ったことのあるジョ

67 正使・新見豊前守正興。なお、新見は西暦5月21日にもパテント・オフィスを訪問している。

68 イスラーム世界における高級官僚の称号。ここでいう「エジプトのパシャ」とは、オスマン帝国領エジプト州総督を務めたムハンマド・アリー・パシャ (Muhammad Ali Pasha, 1769-1849) のことを指すか。

69 オルレアン朝フランスの国王ルイ・フィリップ (1773-1850)。フランス王国最後の国王として知られる。

アンヴィル公<sup>70</sup>の父親であることを連想した。

彼らは12時から1時までの1時間弱、ここに留まった。群衆は同行しなかったが、彼らは世間に馴染んでいるためか、わざわざ1メートルも離れて会いに行く人はほとんどいなかった。しかも、彼らがこのミュージアムを訪れるのは、ほぼ毎日のこととなった。

---

6月10日（日）発行・No. 8677／1頁2 - 3段・6月2日執筆

WASHINGTON, June 2, 1860.

*The Pictures and States at the Capitol—Japanese Criticism—Japanese Grammars and Dictionaries—The Butterfly Feat—The Programme for the Future—The Japanese Visit the Smithsonian Institute—The Experiments Shown Them—Simme-Boozen No Kami Encounters an Alligator—The Return to the Hotel, &c.*

.....

At two P. M. to-day the five chief men of the Embassy, accompanied by the two imperial interpreters and three of their own guardsmen, and escorted by Lieut. Porter and the President's interpreter, left the hotel, in four carriages, to visit the institution founded by James Smithson, an Englishman, and now called the Smithsonian Institute. The first Ambassador appeared to have quite recovered from his slight but recent indisposition which prevented his visiting the Coast Survey office on Thursday, and the rest of the party looked as hale as usual. They have nearly all, however, been troubled with a short attack of illness since their arrival, the prevailing symptoms being headache and fever, but not sufficient to prostrate them. On arriving at their destination they were ushered into the Apparatus room, where Professor Henry, the resident Secretary, commenced giving a series of scientific illustrations for the especial benefit of the national guests. The working of an air pump was first exhibited, and resulted in a loud report, which, being unexpected, somewhat startled them. "The air rushing in when a cannon is fired is the cause of the report," said the Professor, "and it was the air rushing in here (pointing to a jar) that caused that." A pair of brass hemispheres were next produced and operated upon till they were joined and held to gather by the pressure of the air without. Two men then took hold of the handles of these and began pulling in opposite directions to each other, but the hemispheres would not part. The sphere was then placed on a large balancing machine, and it fell apart under a weight of 400 lbs.

70 フランソワ・ドルレアン (François d'Orléans, 1818-1900)。ルイ・フィリップ王とマリー・アメリー王妃の第3王子。なお、幕府との関係は不詳。



The air was pumped out of a glass jar, and the Japanese were invited to place their hands over it, which some of them did to their evident delight, at finding the suction so great as to render it a matter of momentary difficulty to pull them away again. The air was also pumped out of a tube, so as to have the effect of lifting a man seated on a board fixed between a double line of rope, which board fell down twice, to the great discomfiture of the individual who lost its support, and the amusement of the audience. "Keep cool," said the Professor; but the other seemed to think it more easy to preach than to practise.

The operation of bursting a glass jar by pumping air into it was next performed, after which a galvanometer was brought on the table. The window shutters of the room were next closed, and the burning of charcoal points by galvanism exhibited. The effect of the bright specks of flame in the darkness, and the dusky grouping of the Japanese near the operator, gave a theatrical aspect to the scene, and suggested to me an Australian *carrobori*, the moment before the feeding of the fires, the commencement of the dance, and the yelling chorus of the aborigines.

The electric light and a lighted candle were next shown side by side, and the remark was made that the former could be brought to a heat sufficient to melt diamonds. The force of electricity over the compass was illustrated after this, by the process of passing the wire of a battery over the compass, which latter was entirely governed by it in its motions.

A bar of iron was next placed in an induction coil, where it remained perpendicularly, without any support other than the attraction. As a further illustration of the force of the magnetism over the iron, a quantity of iron nails were placed against the under extremity of the bar, and they stuck there as if they were glued on. This amused the Japanese.

There were afterwards some experiments with a magnetic machine, following which the visitors were led to a circular table, on which was a small engine, worked by electricity, and from which hung a small paper flag, in imitation of the imperial banner of Japan. "Japan flag—do you see it?" said Lieutenant Porter, calling the attention of the Orientals, who smiled, and were evidently pleased with the compliment intended them. But this machine was out of order and did not work well.

They were then shown a lighthouse glass, and some of them went behind it and had their face magnified, greatly to the amusement of their fellows and the few citizens who were present. The principle of the organ was then demonstrated in a practical manner by the Professor, causing some hideous noises to arise from a tubular machine, which noises he finally made to resemble the crying of a child. I am by no means partial to hearing children cry, but I think I would prefer their music to that of the wooden tubular machine in question.

The production of electricity from magnetism was next illustrated. The Japanese were invited to talk hold of the handles communicating with the battery. Some of them did

so, and held on as long as they were able to stand the shock, after which they let go and shrank back with a laugh, and endeavored to make their companions adopt the experiment, by pushing them forward and uttering words in the midst of their now noisy mirth, urging them on to the attempt.

The windows were again closed, and some very interesting exhibitions were given of an electrical spark passing through a globe of exhausted air. This was repeated several times in glasses of various shapes and colors.

A piece of paper, lighted by one of these sparks was handed to them, and with this they lighted their pipes and then commenced smoking.

From the apparatus room they were conducted to the gallery of Indian portraits, which they walked around with a considerable show of interest, especially when they were told that they saw before them the likenesses of the chiefs of nearly all the tribes that had originally peopled the country now occupied by ourselves.

From this they were conducted towards the library, but on their way an alligator, occupying an aquarium placed in one of the window niches, was shown to them, and as they seemed a little curious about him, he was taken out of his glass house and placed on the floor by one of the attendants, who held him by the back of the neck. The alligator no sooner found himself at liberty than he commenced running and trailing his body across the floor. The Japanese looked on and moved out of his way with much amusement. At length, owing to sundry gentle kicks from lookers on, he became exasperated, and, with open mouth, he advanced towards Simme-boozen-Nokami, the chief of the Ambassadors, and looked him straight in the face, very threateningly. The pursued, upon this, retreated slowly, with a backward movement, and with the alligator's open jaws only a few inches removed from his own toes. He escaped from him by ascending the steps, at the foot of which the alligator stationed himself till aroused by a touch of his keeper's boot, when he turned round with a hiss of renewed anger. The keeper next placed his foot on and kept him down, while he seized him by the back of the neck and threw him into the glass case again.

On reaching the library the shelves were pointed out to them merely. "We have very few books here, tell them," said the Professor; "but these consist chiefly of the reports of the various scientific societies, and are consequently very valuable."

They were to be taken from this to see the stuffed beasts and birds, one of which latter was presented to them. A couple of water snakes were produced in the Museum by the same individual who so coolly handled the alligator. This man allowed them to coil themselves around him in the most familiar manner. But he was not bitten by them, and their bite is not venomous.

The visitors were then shown the Japanese collection brought home by Commodore Perry, and to which the presents of the Embassy are to be ultimately added. They

were finally, at five o'clock, invited by the Professor to partake of refreshments, and he accordingly led them up to his own apartments, where they were met by his wife and daughters. Here the five chief men and their two interpreter, sat down together with Lieut. Porter and the president's interpreter, and partook of strawberries and ice cream, cakes and champagne, after which they had a smoke in an adjoining room. When ready to leave, at twenty-five minutes past five, the chief Ambassador spoke to his interpreter, and the latter echoed the sentiment uttered to the President's interpreter, who said to the hostess, "The Ambassadors are much obliged to you and the other ladies." They then shook hands all round and retired. They were evidently much pleased with the whole visit, and particularly the young ladies. In returning, the two imperial interpreters chose to walk, and therefore the carriages rolled away, leaving them strolling together across the too extensive grounds of the building from which they had just emerged.

(日)

今日<sup>71</sup>の午後2時、使節団の上役5人は帝国の通訳官2人と護衛官3人を伴い<sup>72</sup>、ポーター海軍大尉<sup>73</sup>と大統領付通訳官の案内で4台の馬車でホテルを出発すると、英国人ジェームズ・スミソンが創設し<sup>74</sup>、現在はスミソニアン・インスティテュートと呼ばれている施設を見学した。首席大使は、木曜日<sup>75</sup>には軽い体調不良で沿岸測量局を訪問できなかったがすっかり回復したようで、他の一行もいつものように元気そうである。しかし、到着するやほぼ全員が頭痛と発熱を主症状とする軽い体調不良に見舞われることとなったが、倒れるほどではなかった。目的地に到着すると装置類展示室<sup>76</sup>に案内され、常任の事務局長であるヘンリー教授が国賓のために特別に一連の科学的な解説を始めた。まず、空気ポンプの作動について展示してみせたが大きな音が鳴ったため、予期せぬことでやや驚かされた。「大砲を撃ったときに空気が流れ込んでくるのがこの音の原因です」と教授は言った。「(瓶を指さして)ここに流れ込んできた空気がそうさせたのです」。次いで一対の真鍮製半球体が出されると、気圧で結合し、集まるようになるまで実験してみせた。2人の男性がこれらの手のない部分を持ち、反対方向に引っ張り始めるが半球体は離れようとしなない。そこで、この球体を大きな釣合試験機の上に載せてみると、400ポンドの重さで崩れ落ちた。

日本人は真空にしたガラス瓶の上に手を置くように促されたが、手を引き離すのが一時困難になるほど吸引力があまりにも強かったため、何人かはあからさまに喜んでいるようだった。真空にした管によって二重に張られたロープの間に固定された板の上に座った人を持ち上げる

71 西暦6月2日。

72 前掲訳注60を参照。

73 前掲訳注55を参照。なお、村垣の日記に「ポルトル案内にて…」とある。

74 ジェームズ・スミソンがスミソニアン協会を設立したことになっているが、正確には前掲訳注11のとおり。

75 西暦5月31日。

76 スミソニアン協会の2階東にあり、様々な機械が展示されていた(財部1998:p.173)(図版10)。

という効能があったが、板は2回落ちたため投げ出された人は大いに狼狽し、観客は歓喜に溢れた。「落ち着け」と教授は言ったが、一人は実践するよりも説くことの方が簡単だ、と思っているようだった。

次に、ガラス瓶を真空にして破裂させる実験が行われた後、検流計が卓上に運ばれた。その後、部屋の窓を閉め、直流電気による木炭片の燃焼を実演して見せた。暗闇の中の明るい炎の斑点と実演者のそばにいる肌の浅黒い日本人集団の効果によってその光景は劇的な雰囲気呈し、火入れの瞬間からアボリジニによる踊りと大合唱が始まるオーストラリアのコロボリー<sup>77</sup>を彷彿とさせるものであった。

次に、電灯と点火された蠟燭とを比較して見せ、電灯はダイヤモンドを溶解させるほどの十分な熱があることが説明された。その後、磁石に作用する電力を実証するために磁石上に電線を通すと、磁力は完全に電力によって制御されていることが示された。

次に、鉄棒を誘導コイルの中に入れると、引力以外に何の支えもない状態で垂直に立った。さらに、鉄に作用する磁力を実証するために、大量の鉄釘を棒の末端に押し当てると、くっついたように張り付いた。これは、日本人を楽しませた。

次に、磁気機器を用いた実験が行われ、その後に円卓に案内された。その上には電気で動く小さなエンジンが付いていて、そこから日本の帝国旗を模した小さな紙製の旗が吊るされていた。「日本の旗だ、見えるか？」と、ポーター海軍大尉が東洋人の関心を引くや、東洋人は微笑み、待遇に明らかに満足した様子だった。しかし、この機械は故障していてうまく作動しなかった。

次に灯台用レンズを見学し、何人かはその後ろに回って顔を拡大させるや、その場にいた同伴者や複数人の市民を大いに楽しませた。その後、教授はオルガンの原理を実践的に実演して見せた。管状機器から恐ろしい音が発せられるが、やがてそれは子供の泣き声に似てきた。私は子供たちの泣き声は決して好きではないが、例の木製筒状機器から発せられる音楽と比べたらまだ良い方だと思う。

次に、電気は磁気から発生することが説明された。日本人には蓄電器と連動しているハンドルを握ってもらい、話をした。何人かは電撃に耐えられるだけ持ちこたえたと、手を放して笑いながら後ずさりし、仲間を前に押し出して騒々しい歓声の中で声を上げながらこの実験に参加するよう勧めたりした。

再び窓が閉められると、真空の球体を電気火花が走る非常に興味深い実験が行われた。これに様々な形や色をしたガラスを用いながら繰り返し行われた<sup>78</sup>。

その火花に火をつけた紙が手渡されると、パイプに火をつけて一服した。

装置類展示室からインディアン肖像画のギャラリー<sup>79</sup>に通され、特に現在我々が居住する国に原住していたほとんどの部族の酋長の肖像が目の前にあると聞かされたときは、かなりの興味を示しながら歩き回った。

77 オーストラリアの民族アボリジニによる儀式。正確なスペルは「Corroboree」。

78 前掲訳注63村垣の日記にみえる記述が、このことに該当するか。

79 名村の日記にみえる「別室ニハ地球万国ノ人像ヲ彩画シタル額数十枚アリ」がこれに該当するか。いわゆるネイティブ・アメリカンの43種族、総数150以上の肖像画が展示されていたとされる（財部1998：p.174）（図版11）。

この後、図書館の方へ案内されたが、その途上で窓のニッチの一つに置かれた水槽に入っているワニを見せられた。少し関心を示したようだったので、係員の一人がワニをガラスケースから出し、首根っこを掴みながら床上に置いた。ワニは解き放たれるや床上を走り回ったり、体を引きずるように這った。日本人はそれを見て面白がるやワニの動きを遮ったりするようになり、何度も軽く蹴ったりしていくうちに憤慨したワニは口を開けたまま首席大使である新見豊前守の方に進み出ると、彼の顔の真正面から思いっきり威嚇するようになった。この時、ワニが開けている顎が大使の爪先から数インチしか離れていないのを見た追っ手は、後ずさりしながらゆっくりと退却した。大使は階段を上ってワニから逃れ、ワニはその足元で微動だにしなかったが、飼育係がブーツで当てるや再び腹を立てながら振り向いた。飼育係はワニを足で押さえつけると、首根っこを掴むや再びガラスケースへと放り込んだ<sup>80</sup>。

図書館<sup>81</sup>に到着するや、棚を指差した。「ここには本が少ししかありません、と彼らに伝えてください」と、教授は言った。「ただし、主にあらゆる科学系学会の報告書で占められており、非常に貴重なものです」。

大使たちはここから動物や鳥の剥製を見に行くことになり、鳥の剥製のうちの1つが贈られた。ミュージアムでは、先ほどのワニを手懐けた同一人物の手で水蛇が2匹飼育されていた。この方は、すこぶる慣れた手つきで水蛇を首回りに巻きつけた。しかし、彼は水蛇に噛まれることはなく、また噛まれても毒はない。

その後、ペリー提督によって持ち込まれた日本のコレクション<sup>82</sup>を見せてもらい、最終的には使節団の贈答品も加えられることになっている。5時になると、教授は茶菓に招こうと一行を自室に案内すると、妻と娘たちが出迎えた<sup>83</sup>。上役5名と通訳官2名は、ポーター海軍大尉や大統領付通訳官と同席し、イチゴとアイスクリーム、ケーキ、シャンパンを頂いたのち、隣の部屋で一服した。5時25分には出発の準備が整ったところで、首席大使は通訳官に話しかけ、さらに大統領付通訳官を通して「大使は、貴殿ならびに貴婦人方のご厚意に感謝いたします」との気持ちを伝えた。そして、一行は握手を交わしつつ退席した。大使たちはこの訪問自体を、特に令嬢方にとっても満足しているようだった。その帰途、帝国の通訳官2名は徒歩で戻ることにしたため馬車は走り去り、先ほど出てきたばかりの建物の建つ広大な敷地内を共に散策し、帰路に就いた。

80 村垣の日記に「かねの水盤に網蓋したる中に鰐魚の生たる有。板敷に出して棒もて打てば、いかりて口を開く。實に鰐口とて大なり。形はやもりに似て脊に鱗あり。長さ四尺ばかりなり。」とある。

81 スミソニアン協会の西翼にあり、5万冊を超える図書・論文等が配列されていた（財部1998：p.175）（図版12）。

82 前掲訳注6を参照。

83 前掲訳注64・65を参照。

## 解題

『THE NEW YORK HERALD』は、1835年にジェームズ・G・ベネット（James G. Bennett Sr., 1795-1872）によって創刊された大判日刊紙で、1924年に『The New-York Tribune』に吸収併合されるまでの89年間にニューヨーク市を拠点として発行された新聞である（なお、『NEW YORK Herald Tribune』として1966年まで存続）。

さて、『THE NEW YORK HERALD』は1860年当時、万延元年遣米使節団がアメリカ合衆国を公式訪問中に記者が取材同行していたようで、「THE JAPANESE」「Movements of the Japanese」などといった大見出しで銘打たれた記事によってその様子が綴られている。本報告は、『THE NEW YORK HERALD』の近代博物館形成史、または欧米博物館見聞史に係る史料としての価値を見出すことを目的として整理したものであるが、遣米使節団の動静についても訳注にて示しているように日米双方の史料にアプローチした実証主義的な検証によって双方向的なエビデンスを見出すことのできた箇所も複数認められた。加えてスケジュールに関しても記事からは5月19・21・31日にパテント・オフィス、5月26・31・6月2日にスミソニアン協会を訪問したことが確認されたが、日記群には記録のない日付も新たに把握された。現に、6月10日発行（5月31日執筆）記事にみえる「Moreover, their visits to this museum have become of almost daily occurrence.」との一文などからは、遣米使節団の一行が決められた日に一回限りで訪問していたのではなく、そのスケジュールは流動的であった可能性が浮上することとなった。

『THE NEW YORK HERALD』において注目すべきは、パテント・オフィスとスミソニアン協会が「Museum」として認識されていたことを間接的に示す記事を確認できた点にあり、前者では6月10日発行（5月31日執筆）記事にみえる「this Museum」、後者では5月29日発行（同25〔26〕日執筆）記事、6月2日発行（5月30日執筆）にみえる「Smithsonian Museum」、6月10日発行（6月2日執筆）記事にみえる「the Museum」がその一例である。“メディアは社会を映し出す鏡”というよく知られたメタファーによっても示されるように、メディアによる描写はその当時の世相を反映しているといわれる。すなわち、1860年代当時のアメリカ社会の認識が新聞記事の一文として表出されている可能性が想起され、19世紀の欧米諸国における「Museum」という近代的観念の社会的諸相を明らかにするうえでも足掛かりとなる。

なお、スミソニアン協会のミュージアムの性格については、アメリカ側の史資料をも底本とした財部香枝による一連の研究（1998・1999・2002）によってある程度明らかにされているが、パテント・オフィスについては先行研究においては未だその域を出ていない。もっとも、スミソニアン協会は1858年にアメリカ合衆国国立博物館（United States National Museum）に連なる展示施設を内部に開設しているが、パテント・オフィスに関しては「Museum」とした公式の記録は確認されていない。しかしながら、本記事からは両者ともそのように認識されていたことがうかがえる。とりわけ、5月31日発行（同28日執筆）記事にみえる記者とジェームズ・ブキャナン大統領との語らひは興味深いものがあり、「…I wish they shall go to the Patent Office.」の一文はパテント・オフィスのミュージアムの性格を示唆する視点であるのみならず、大統領本人の発言という点においても貴重な情報源である。

遣米使節団による贈答品については、前記大統領の発言やそれに続く「…when they are thrown open for inspection at the Patent Office…」の一文、加藤や佐藤の日記からもパテント・オフィスに移管されることが間接的に示されているが、6月10日発行（同2日執筆）記事にみえる「…to which the presents of the Embassy are to be ultimately added.」という一文からは、最終的にはスミソニアン協会に移管されたことが示唆されている。この一文だけでは判断しづらいが、福岡万里子らによる最新の研究（福岡ほか2021）によって遣米使節団による贈答品の一部は現在スミソニアン協会に収蔵されていることが確認され、他方でペリーのコレクションを含めたアメリカ合衆国連邦政府によって収集された自然史系資料はスミソニアン協会に収蔵される以前にはパテント・オフィスに保管されていたようであり（財部1998:p.172・1999:p.67）、両者の関係性を検討していくうえでも見過ごすことはできないだろう。このことについては、すでに英字史資料を開拓していることから、引き続き明らかにしていく所存である。

「Museum」は、言うまでもなく西欧近代にローカルな思想であり、制度でもあるが、その訳語としての「博物館」という語が確立され、普及していくプロセスを考察するうえで、幕末維新期の日本人が見学した当時の欧米のミュージアムは、こういったポリシーやシステムの下に運用され、当時の社会的諸相の中でどのようにまなざされていたのかを明らかにしていくことも必要な作業といえる。そのためには、往年の研究においてウェイトを占める日本側の史資料に限らず、海外のそれらに対するアプローチも欠かせない。『THE NEW YORK HERALD』は、いわゆる二次史料でありながらも当時発行された新聞記事という性質上、文献史料としての学術的（博物館学的）な価値が認められることを確認したが、『THE NEW YORK HERALD』以外の新聞をはじめとするその他の史資料についても、近代博物館形成史研究においても有用である可能性を秘めているといえる。（伊東）

〔研究後記〕6月10日発行（5月31日・6月2日執筆）記事について、翻訳作業後に田中1920文献に「紐育ヘラルド紙記事」として訳文が掲載（pp.27-37）されていたことが判明した。なお、当該訳文は完訳ではない模様で、一部に脱文が認められたことを追記しておく。

## 参考文献

- 奥田 環 2011「名村五八郎元度」全日本博物館学会編『博物館学事典』雄山閣、p.256  
木村鉄太 1974『航米記』肥後国史料叢書第二巻、青潮社  
国立科学博物館編 1977『国立科学博物館百年史』pp.1-4  
後藤純郎 1990「万延元年遣米使節と博物館、図書館の見聞」『教育学雑誌』第24号、日本大学教育学会、pp.1-14  
駒見和夫 2019「万延元年遣米使節団が出会ったミュージアム」『Museum Study：明治大学学芸員養成課程紀要』30、pp.15-25  
佐野 鼎 1946『萬延元年訪米日記』金澤文化協會  
椎名仙卓 1982「幕末の遣米使節団が見聞した博物館—「博物館」という名称の成立に関連して」『博物館研究』Vol.17、No.11、社団法人日本博物館協会、pp.3-12  
椎名仙卓 1988『日本博物館発達史』雄山閣出版、pp.16-28

- 椎名仙卓 2005『日本博物館成立史—博覧会から博物館へ』雄山閣、pp.30-32
- 財部香枝 1998「幕末における西洋博物館の受容—万延元年（1860年）遣米使節団が発見した博物館」『情報文化研究』第8号、名古屋大学情報文化学部・大学院人間情報学研究科、pp.161-179
- 財部香枝 1999「幕末における西洋自然史博物館の受容—万延元年（1860年）遣米使節団とスミソニアン・インスティテューション」『博物館学雑誌』第24巻第2号、全日本博物館学会、pp.63-79
- 財部香枝 2002『幕末・明治初年における西洋の博物館受容過程の研究—スミソニアンとの関係を中心に』名古屋大学大学院人間情報学研究科博士論文
- 田中一貞編 1920『萬延元年遣米使節圖録』丸善
- 東京国立博物館編 1973『東京国立博物館百年史』pp.8-10
- 日米修好通商百年記念行事運営会編 1960『万延元年遣米使節史料集成』第三巻、風間書房
- 日米修好通商百年記念行事運営会編 1961a『万延元年遣米使節史料集成』第一巻、風間書房
- 日米修好通商百年記念行事運営会編 1961b『万延元年遣米使節史料集成』第二巻、風間書房
- 日米修好通商百年記念行事運営会編 1961c『万延元年遣米使節史料集成』第七巻、風間書房
- 日本史籍協會編 1971『遣外使節日記纂輯一』日本史籍協會叢書96、東京大學出版會
- 沼田次郎・松沢弘陽編 1974『西洋見聞集』岩波書店
- 樋口秀雄・椎名仙卓 1981「欧米博物館施設のわが国への紹介」『博物館学講座』第2巻、雄山閣出版、pp.47-48
- 福井庸子 2010『わが国における博物館成立過程の研究—展示空間の教育的特質』早稲田大学大学院教育学研究科博士論文
- 福岡万里子、日高 薫、澤田和人 2021「スミソニアン研究機構所蔵の幕末日本関係コレクション：ペリー・ハリス・遣米使節団」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集、pp.101-165
- 山本哲也 2010「『博物館』の成立前後に海外の展示を見てきた日本人」『展示学』第48号、日本展示学会、pp.28-35
- 山本哲也 2012「名村五八郎元度」青木 豊・矢島國雄編『博物館学人物史』下、雄山閣、pp.49-53
- 吉田常吉編 1960『航海日記』時事通信社
- Library of Congress HP (<https://www.loc.gov/>)
- Library of Congress HP / Catalog (<https://catalog.loc.gov>)
- National Archives HP (<https://www.archives.gov/>)
- National Museum of Natural History, Smithsonian Institution HP (<https://naturalhistory.si.edu/>)
- National Portrait Gallery, Smithsonian Institution HP (<https://npg.si.edu/>)
- Smithsonian Institution HP (<https://www.si.edu/>)
- Smithsonian Institution Archives HP (<https://siarchives.si.edu/>)
- United States Patent and Trademark Office HP (<https://www.uspto.gov/>)





図版1 *THE NEW YORK HERALD; 1 January-30 June, 1860* 紙合冊本・表紙  
(58.1cm × 40.0cm × 10.3cm 個人蔵)



図版2 THE NEW YORK HERALD. May 20, 1860

(56.7cm × 38.5cm 個人蔵)



図版3 *Patent Office, Washington, D. C.*

(National Portrait Gallery, Smithsonian Institution; NPG.POB75)



図版4 *Old Patent Office - Model Room (1861-65)*

(Library of Congress; LC-DIG-cwpbh-03283)



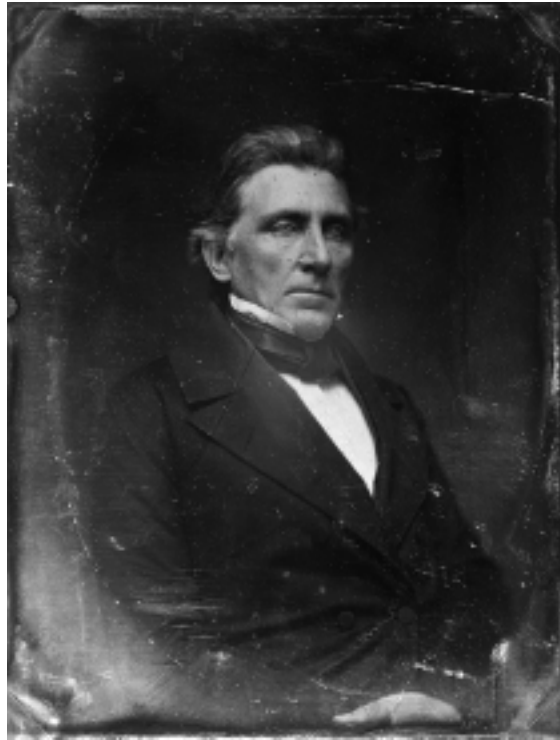
図版5 *Smithsonian Institute, 1860-65*

(Library of Congress; LC-DIG-cwpbh-03286)

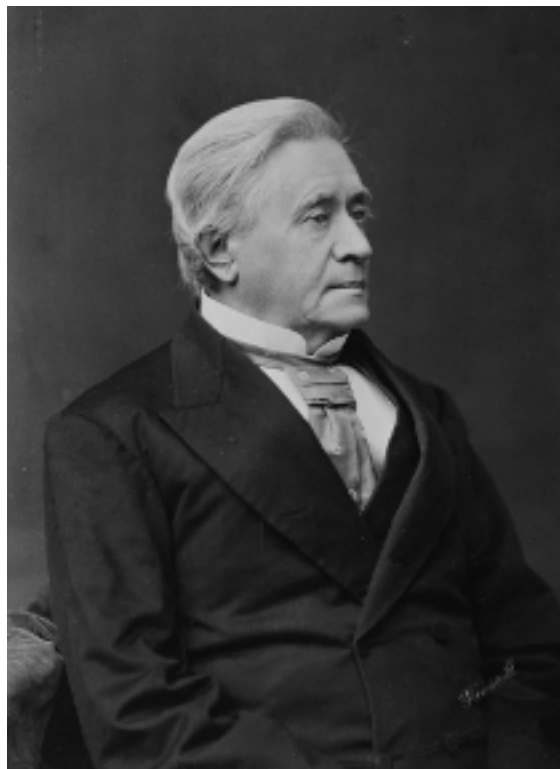


図版6 *Lower Main Hall Exhibits, Smithsonian Institution Building, or Castle*

(Smithsonian Institution Archives; SIA\_000095\_B41\_F15\_009)

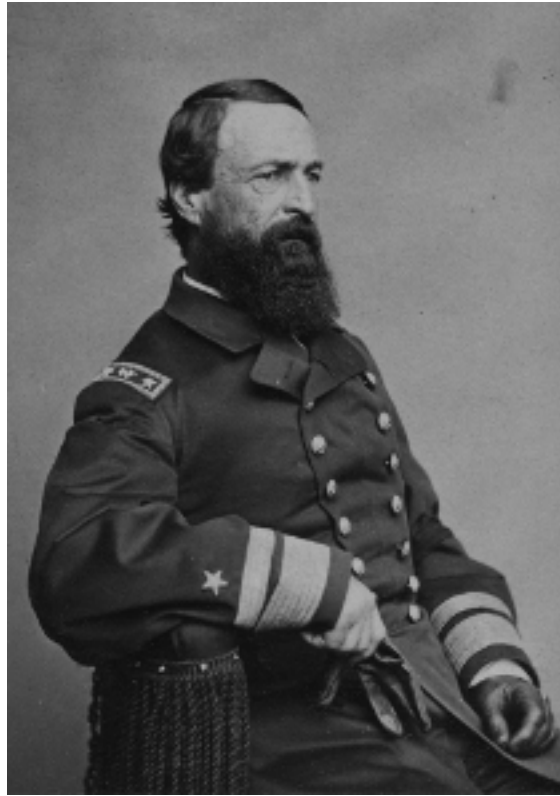


図版7 *William McKendree Gwin*  
(Library of Congress; LC-USZ62-110003)



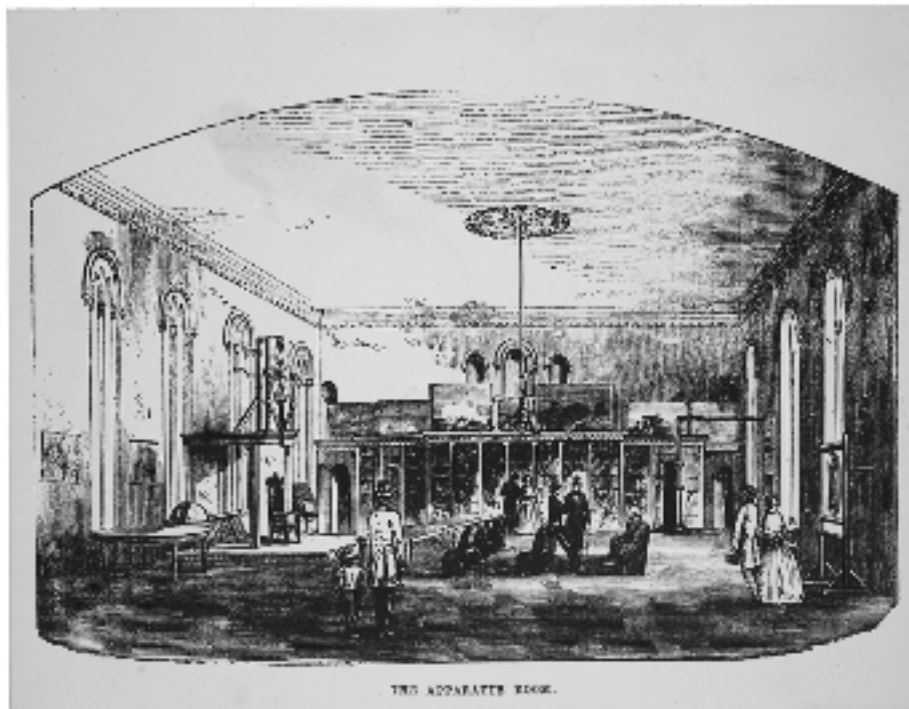
図版8 *Portrait of Joseph Henry (1797-1878)*  
(Smithsonian Institution Archives; SIA RU000095)

史料翻訳『THE NEW YORK HERALD』1860年版



図版9 *David Dixon Porter*

(National Portrait Gallery, Smithsonian Institution; S/NPG.78.77)



図版10 *Apparatus Room, Smithsonian Institution Building, or Castle*

(Smithsonian Institution Archives; SIA\_000095\_B41\_F05\_001)



図版11 *Gallery of Art, Smithsonian Institution Building, or Castle*  
(Smithsonian Institution Archives; SIA\_000095\_B41\_F11\_001)



図版12 *Library, West Wing, Smithsonian Institution Building, or Castle*  
(Smithsonian Institution Archives; SIA\_000095\_B31A\_F22\_001)

表1 万延元年遣米使節団関係史料に確認できるパテント・オフィスとスミソニアン協会の表現

| 日記名                 | パテント・オフィス                            | スミソニアン協会                         |
|---------------------|--------------------------------------|----------------------------------|
| 村垣淡路守範正<br>『航海日記』   | 百物館なるよし<br>パテント=オヒースといへる所            | スミスヲニヲといへる奇品はた究理の館               |
| 玉蟲左太夫誼茂<br>『航米日録』   | 博物所ト云フ義ナリ<br>パテントオフユシ                | スメフリウネンインシラーチユー                  |
| 柳川兼三郎当清<br>『航海日記』   | 我國の醫學館の類                             | 國の寺院よふ奈る所<br>前尔しるしたる醫學館の類        |
| 野々村市之進忠実<br>『航海日録』  | 何役所カ其名ヲ不聞                            | 諸国ノ珍物ヲ集メタル処                      |
| 福嶋恵三郎義言<br>『花旗航海日誌』 | 名器宝物収蔵ノ所                             | 大ナル家                             |
| 木村鉄太敬直<br>『航米記』     | —                                    | スソツツシヨ子エン。イステチウセン<br>万国ノ奇物ヲ収タル寺院 |
| 森田岡太郎清行<br>『亜行日記』   | パテントオフシー<br>器械局                      | 珍禽虫奇獸珍貝魚類等其外百貨貯蔵ノ所<br>スミスソニエン    |
| 日高圭三郎為善<br>『米行日誌』   | 諸国物品館                                | —                                |
| 名村五八郎元度<br>『亜行日記』   | パテントオフィス<br>博物館                      | 電気機具等ヲ備置アル役所                     |
| 村山伯元淳<br>『奉使日録』     | パテントオフシー<br>諸国産物并諸国工夫之器械類雛形ヲ<br>聚ムル処 | 諸国物産ヲ聚タル「スミツソニエン」<br>ト唱アル所       |
| 加藤素毛雅英<br>『二夜語』     | 宝蔵                                   | —                                |
| 佐藤恒蔵秀長<br>『米行日記』    | パテントール<br>國王の寶蔵                      | パテントウル                           |
| 佐野貞輔鼎<br>『萬延元年訪米日記』 | パテントオフィス<br>前の寶蔵に似たるもの               | スミソニアンインスチチューション<br>寶蔵の類         |

※ 駒見2019：表ほかをもとに整理。



表2 万延元年遣米使節団関係史料に確認できるパテント・オフィスとスミソニアン協会の見学日付

| 西暦日付  | 和暦日付  | パテント・オフィス                                                                                                                                         | スミソニアン協会                                                                                    |
|-------|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| 5月21日 | 4月2日  | (新見豊前守正興〔正使〕)、村垣淡路守範正〔副使〕、(小栗豊後守忠順〔目付〕)、玉蟲左太夫誼茂〔正史従者〕、柳川兼三郎当清〔正史従者〕、野々村市之進忠実〔副使従者〕、福嶋恵三郎義言〔立会従者〕、森田岡太郎清行〔勘定方〕、名村五八郎元度〔通弁方〕、日高圭三郎為善・〔目付方〕村山伯元淳〔医師〕 | 佐野貞輔鼎〔勘定方従者〕                                                                                |
| 5月22日 | 4月3日  | 加藤素毛雅英〔賄方〕                                                                                                                                        | —                                                                                           |
| 5月23日 | 4月4日  | —                                                                                                                                                 | —                                                                                           |
| 5月24日 | 4月5日  | —                                                                                                                                                 | —                                                                                           |
| 5月25日 | 4月6日  | —                                                                                                                                                 | —                                                                                           |
| 5月26日 | 4月7日  | —                                                                                                                                                 | 玉蟲左太夫誼茂〔正史従者〕、柳川兼三郎当清〔正史従者〕、野々村市之進忠実〔副使従者〕、福嶋恵三郎義言〔立会従者〕、木村鉄太敬直〔立会従者〕、加藤素毛雅英〔賄方〕、佐藤恒蔵秀長〔賄方〕 |
| 5月27日 | 4月8日  | —                                                                                                                                                 | —                                                                                           |
| 5月28日 | 4月9日  | 佐藤恒蔵秀長〔賄方〕                                                                                                                                        | —                                                                                           |
| 5月29日 | 4月10日 | —                                                                                                                                                 | —                                                                                           |
| 5月30日 | 4月11日 | —                                                                                                                                                 | —                                                                                           |
| 5月31日 | 4月12日 | —                                                                                                                                                 | (益頭駿次郎尚俊〔勘定方〕)、(日高圭三郎為善〔目付方〕)、村山伯元淳〔医師〕、(宮崎立元正義〔医師〕)                                        |
| 6月1日  | 4月13日 | —                                                                                                                                                 | —                                                                                           |
| 6月2日  | 4月14日 | —                                                                                                                                                 | 村垣淡路守範正〔副使〕、名村五八郎元度〔通弁方〕                                                                    |
| 6月3日  | 4月15日 | —                                                                                                                                                 | —                                                                                           |
| 6月4日  | 4月16日 | —                                                                                                                                                 | —                                                                                           |
| 6月5日  | 4月17日 | —                                                                                                                                                 | 森田岡太郎清行〔勘定方〕、(塚原重五郎昌義〔外国方〕)、(立石斧次郎教之〔通弁方〕)                                                  |
| 日付不明  | 日付不明  | 佐野貞輔鼎〔勘定方従者〕                                                                                                                                      | —                                                                                           |

※ 駒見2019：表、財部1998：図表1、ほかをもとに整理。

※ 表内の( )は、日記群に確認できる日記執筆者以外の見学者名を、〔 〕は当時の役職名を挙げている。